

ニューパルツ学術訪問団報告記

山内 圭 桑原 一良
塚本千恵子 矢藤誠慈郎

海外学術交流

A Report of the Niimi College Official Delegation to State University of New York at New Paltz

Kiyoshi YAMAUCHI Kazuyoshi KUWAHARA
Chieko TSUKAMOTO Seijiro YATO
(2002年11月1日受理)

平成14年3月19日から4月2日までの日程で、計22名から構成されたニューパルツ学術訪問団が派遣された。今回の学術訪問団派遣は同時に研修旅行の意味合いも持ち、滞在中に施設訪問や英会話研修も行った。ここに記念すべき第1回の新見公立短期大学のニューパルツへの学術訪問団派遣についてまとめ、今後の両大学の交流に役立てたい。

はじめに

本学の設立母体の一つ、大佐町は、1998年アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューパルツ・ビレッジ (New Paltz Village, New York) と姉妹都市協定を締結し、以後活発な交流を続けている。ニューパルツ・ビレッジからの訪問団が来町する折には新見公立短期大学（以下、原則的に本学と表記）も公式訪問を受けている（1998年10月8日、2000年8月17日、2002年10月17日）。また山内は1999年及び2001年に大佐町の訪問団の一員としてニューパルツ・ビレッジを訪問した。1999年に訪問した際には、同地区にあるニューヨーク州立大学ニューパルツ校 (State University of New York at New Paltz、以下、原則的に州立大学と表記) と本学との間に覚書が交わされ、将来の学術交流に向けた基盤が作られた。そのような交流が続く中、自治体間のみならず、学校間交流も始まり、大佐町からは2000年より、ニューパルツ・ビレッジからは2001年より中学生の交換訪問も始まっ

た。その流れの中、新居志郎前学長の方針のもと、本学からも公式の訪問団を派遣しようという気運が高まった。

本学では1998年よりオーストラリアのメルボルンで短期海外研修旅行を実施しているが¹⁾、オーストラリアと同様、アメリカにも研修旅行に行きたいという学生の希望も多く、山内はアメリカへの研修訪問先を模索していた。今回の訪問が実施され、それが実現できた。

なお、本論の2. ニューパルツ滞在、A) 式典、については桑原が、B) 看護学科の施設訪問、については塚本が、C) 幼児教育学科の施設訪問、については矢藤が、その他の項目については山内がそれぞれ執筆し、相互に推敲し合った。

1. 準 備

アメリカへの学術交流団の派遣先としては、新見市が交流を進めているノースカロライナ州グリーンズボロ (Greensboro, North Carolina) も考

えられた。その可能性を計るべく、山内は2001年3月グリーンズボロを訪問し、新見市より推薦されたギルフォード・テクニカル・コミュニティー・カレッジ（Guilford Technical Community College）で3月23日、ドナルド・キャメロン（Donald Cameron）学長、ジェラルド・パンフリー（Gerald Pumphrey）副学長と会見した。同大学はとてもよい学校であるように見受けられたが、新見市とグリーンズボロとの交流に山内が直接関わっていないため、親密な人脈もあまりなく、研修旅行の実施先として話を進めていくのはやや困難であると考えた。

その一方、山内も直接関わっている大佐町とニューパルツ・ビレッジとの交流の中で生まれてきた、州立大学と本学との交流は、かなりの人脈もあり、実現しやすいと判断した。

先述のように、州立大学と本学との間には1999年、覚書が交わされた。その内容については資料1及び2を参照していただきたい。その中には、第2項「密接な相互協力を通じ、両大学は学生及び教職員の教育的交流の機会を増やす可能性を検討するものとする」の項目もある。

2001年3月先述のグリーンズボロ訪問の後、山内はニューパルツ・ビレッジを訪問し、3月26日、州立大学の国際交流局長ブルース・シルナー（Bruce Sillner）氏と話し合いを持ち、交流団派遣の可能性について討議した。引き続き2001年9月10日、山内は再び同校を訪問し、さらに具体的な話し合いを進めた。その他、電話、電子メール、ファックスなどでも協議を進め、学術交流団の派遣について詳細を詰めていった。

また、この訪問団派遣の計画の段階で、新見ライオンズクラブにその趣旨にご賛同いただき、参加する学生に対し、奨学金をいただくことになった。また新見ライオンズクラブの三上眞会長（当時）が別行程で渡米し、ニューパルツ・ビレッジで合流し、ニューパルツ・ライオンズクラブの例会に奨学金を受けた学生と通訳の山内とともに出席することが決定した。また新見公立短期大学後援会にもオーストラリア研修と同様、研修の趣旨に対して理解をいただき、参加する学生に対して、助成金を支給していただいた。両団体には深

く感謝の意を表したい。

今回の訪問は公式訪問になるので、州立大学の代表者列席のもと記念式典を開いていただく必要があった。その日程の調整にやや手間取ったが、最終的に3月29日にデビッド・ラバリー（David Lavallee）副学長の出席をいただき開催することになった。

また、ニューパルツ・ビレッジ滞在中の研修内容については、こちらから本学のメルボルンでの研修旅行の内容を送り、それを参考に同様の研修計画を立ててもらった。メルボルンでは学生は半日は英語レッスンを受け、半日は関連施設を訪問するというものであった。結局、資料3に示されるようなスケジュールが出来上がった。

そして、市民との交流のため、また生の英語に触れるため、学生参加者は一般家庭にホームステイする。これもオーストラリアでの研修と同様である。また教員の矢藤もホームステイを体験した。ホームステイ先の募集については、ニューパルツ国際交流協会の会長（当時）ビッキー・ダンスキン（Vici Danskin）氏にお願いした。他の教員は、町の中心にある宿泊施設であるベッド&ブレイクファストのイン・アット・オーチャード・ハイツ（The Inn at Orchard Heights）に宿泊（間借り）した。この宿泊先のご主人夫婦は、とても親しみやすく、まるでホームステイをしているようであった。

また、今回の訪問団派遣の実施においてもっとも懸念されたことは、2001年9月11日にニューヨークなどで発生した同時テロ後の安全性ということであった。テロ後は各方面の海外研修旅行などが中止や延期されるなか、万一の事故があったらとの不安もあった。しかし2001年9月テロの影響で、帰国が延びた山内ら大佐町訪問団を世話してくれたニューパルツ・ビレッジの人々に対する恩返しとして、明るくて元気な学生達や、優秀な同僚達を連れて行きたいという気持ちが山内にはあった。

ニューパルツ・ビレッジへの経路としては、まず日本からの便数の多いニューヨーク・シティに入るのが、市内観光もできるので便利ではあるが、今回は安全面への配慮、つまり参加者とその

保護者に対する不安の軽減のため、行きはオルバニー (Albany) 入りすることを選んだ。そしてニューパルツ・ビレッジ滞在中の一日、日帰りでニューヨーク・シティを観光しようと考えた。また、帰りの便はオルバニーから取ることが難しかったため、ニューヨーク・シティ郊外のニューアーク空港出発便を利用した。

最終的な訪問団員は、教員からは団長として桑原一良 (教授)、通訳として山内圭 (助教授)、看護学科代表として塚本千恵子 (助教授)、幼児教育学科代表として矢藤誠慈郎 (助教授) が参加した。また英語が堪能な桑原教授の俊子夫人も同行した。学生参加者は看護学科2年生から安次富弥生、梅野友子、兼重亜矢子、陣内亜樹子、園部治子の5名、看護学科1年生から伊垢離けい子、岩田奈緒美、上岸ちひろ、甲斐美智子、栗本麻衣子、重信早織の6名、そして幼児教育学科の1年生から伊藤亜紀、金久弥生、田中かおり、福田さやか、本間優子、溝田麻衣の6名が参加し、計22名の訪問団になった。残念ながら地域福祉学科の教員及び学生の参加はなかった。

2. ニューパルツ滞在

A) 式典

新見公立短期大学とニューヨーク州立大学ニューパルツ校との協定覚書に基づく、第1回の海外学術交流団 (アメリカ合衆国) の公的イベントとしての、記念セレモニーが3月29日に州立大学で開催された。本学の参加学生と教員に対して、会場は満席になるほどに諸関係者の出席をいただき、同校の交流への熱意と、我々の感謝の気持ちが式典の始まる前から満ち溢れていた。州立大学のシルナー国際交流局長の司会と山内の通訳のもとに厳粛に式典が執り行なわれた。ラバリー副学長の開会と歓迎の言葉に続き、今回の交流の大きな成果と、今後の交流発展への期待を熱く語られたトム・ナイクイスト (Tom Nyquist) 市長の人柄を表した祝辞は明るさとユーモアで、会場の雰囲気を一挙に和らげ、式典の緊張が解けた。新見公立短期大学を代表して桑原は、次のような簡潔なお礼の言葉を述べ、新居前学長より託され

た式典への言葉を口誦した (山内が逐次通訳)。

Thank you.

Hello, ladies and gentlemen. First of all I would like to say "Thank you so much" for this wonderful ceremony for us. My name is Kazuyoshi Kuwahara, the Director of the College Library and the former Director of Students Affairs. I am a professor of Physical Education and Sports History. Since the term of the President Shiro Nii is finishing in this March and our new president, Dr. Masayoshi Namba has not taken office yet. I have come as deputy president to greet you.

It is an honor for us to have a good exchange with your great University. All the students who could take part today also find it very proud.

Now it is the time to introduce the message from our President, Dr. Shiro Nii. I am not good at English, but I can do Japanese. But, if anybody finds my mistakes, please let me know, OK?

Mr. Yamauchi, assistant professor would translate it here.

謹啓

此度、桑原一良教授を代表とする本学の21名の一行が貴学を訪問するにあたり、書面でご挨拶できますことを大変嬉しく思っております。大佐町と私共の新見公立短期大学は、共に岡山県下の阿新と呼ばれる地域内にあり、両者は相互に密接な関係にあります。他方、ニューパルツと大佐町との間で盛んに交流が行なわれていることから、ニューパルツと本学の間にも交流の機会が生じることになりました。ニューパルツから本学への最初の来訪はナイクイスト市長ご夫妻やマークス名誉教授など総勢10名の方々によるものであり、これらの方々とは私共教職員は楽しく懇談することができました。その後ボウエン学長と私との間で、貴学と私共短大の間の相互理解を促進するための覚書を交換しました。次いで、2000年8月17日にはバップさんを代表とする11名の方々が本学を訪問されました。同年9月に私たちは私共短大の創立20周年の式典を挙りましたが、その節にはボ

ウエン学長が祝電をお送り下さいました。貴学と本学とは創立の歴史は勿論のこと、大学の規模や教育の課程においてもかなり異なる点があると思います。そのことを充分考慮の上、貴学の施設を見学し、教員のプログラムを学び、また貴学学生の学業の現状を知ることは、私共短大の教員並びに学生にとって、大変よい参考になることと思えます。

今後貴学の教員や学生の中で、日本のことや私共短大や大佐町や新見市に興味のある方がおられましたら訪問して下さることを期待します。そして、将来に向かって、貴学と本学との間に、益々緊密な関係が樹立されることを望んで止みません。

敬具

新見公立短期大学
学長 新居志郎

この新居前学長の挨拶を山内は次のように英語に訳し、紹介した。

President of State University of New York at New Paltz

March 18, 2002

Dear President,

I am very much pleased to greet you with a letter to you on the occasion of sending the delegation of 22 people headed by Professor Kazuyoshi Kuwahara.

Osa Town and Niimi College are both in Ashin Area, Okayama Prefecture and are in close relationship with each other. Moreover New Paltz Village and Osa Town are in close relationship, and that makes this exchange program of both institutions possible.

The first visit from New Paltz Village to Niimi College was done by Mayor Nyquist and his wife, Professor Emeritus, Dr. Marks, and seven other members of the delegation on October 8, 1998. We had a very good time talking with the members of the delegation.

Then former President Roger Bowen and I signed the memorandum of understanding to promote mutual understanding between the two colleges.

On August 17, 2000, twelve members of the

delegation from New Paltz headed by Linda Babb visited our campus.

In September of the same year, we had our 20th anniversary ceremony of our college, and President Bowen sent a telegram of congratulations to us. We appreciated it very much.

I understand that we are much younger and much smaller than you, and there are several differences between the curricula of the two colleges.

Even with noticing these differences, it would be meaningful and inspiring for our faculty and students to visit your facilities, to learn educational programs and to see how your students learn.

I hope that when some of your colleagues and students are interested in Japan or Niimi College or Osa Town or Niimi City, I would like them to visit our area. I sincerely hope that stronger and closer ties are built between two colleges.

Best Regards,

Shiro Nii,

President, Niimi College

口誦のあとしばらく歓談に入り、両校の記念品の交換がラバリー副学長と桑原団長の間で相互に行なわれ大きな拍手が沸いたあと、今回の交流の成果を代表学生が次々と、流暢な英語で披露し、前に増しての盛大な拍手が鳴り響いたのは圧巻であった。さらに、全学生に対し、修了証が一人一人に手渡され、学生の紅潮した顔に達成感が満ち溢れていた。マークス名誉教授のイースターの歌の披露に続いて、お世話になった関係者の紹介があった。和やかな交流のなか本学の学生達が日本の歌を披露し、式典を終えた。

やや式典からの内容とは離れるが、第1回海外学術交流団という意味で次の点を特記しておきたい。今回のニューヨーク滞在中、山内は国際スタインベック学会で研究発表を行ない大きな成果を収め、桑原はクーパースタウンの野球博物館と、ニューヨーク自然博物館のアメリカ野球博覧會に出向し多大な資料収集と検索に成果をあげた。

B) 看護学科の施設訪問

看護学科の学生及び教員塚本は以下のような日程で次の施設を訪問させていただいた。なお3月21日、24日、26日は山内も通訳として同行した。

- 3月21日 ゲイトウェイ・インダストリーズ（作業所）（Gateway Industries）
- 3月22日 セント・フランシス・ナーシングホーム（老人ホーム）（St. Francis Nursing Home）
- 3月22日 セント・フランシス・ホスピタル（病院）（St. Francis Hospital）
- 3月24日 ホルマーク・ナーシングホーム（老人ホーム）（Hallmark Nursing Home）
- 3月26日 バッサー・ホスピタル（病院） Vassar Brothers Hospital

アメリカの医療・看護を学べるように作業所・ナーシングホーム・病院を計画していただき5ヶ所の施設を訪問することができた。

a) ゲイトウェイ・インダストリーズ（作業所）

3月21日に施設訪問として最初に作業所を訪問した。同作業所は1957年、利益追求のためではなく、精神障害者と身体障害者の訓練のための施設として、そして職業訓練・生活の技術を学ぶための施設として設立された。

利用者は精神障害者51% 情緒不安19% 身体障害者9% その他（知的障害者）でニューヨーク州の精神科や施設からの紹介により受け入れている。毎日の平均利用者は180人位で利用者の為の宿泊施設ゲイトウェイハウスが設立されて、生活の場の確保とその生活を支援するシステムが考慮され利用者のための便宜がはかられている。

作業内容は同作業所で考案された独自の製品や、企業依頼の製品の作成・注文を受けて清掃・調理等も行われている。

最近ではコンピュータの技術が重視され、企業よりパソコンの寄贈があり、その技術もマスターして就業するのに役立っている。

企業依頼の製品は倉庫に山のように積み重ねられて、訓練のための作業が出来ないようなことはない。他の手間賃の安いところへ企業が依頼するようなことはなく、ボランティア精神によるものだ

と話されていた。（日本の作業所の現状は製品がなく作業ができないという日がある。）日本のように同じ作業所で同じ作業をするのではなく、個人の能力に合わせて、また利用者が求めている能力をのばす事ができる作業をしている。同作業所で考案された製品は、他の企業の製品と同等に一般に市販されている。日本では福祉の店のような所で区別して市販されていることが多いのに対し、この施設では、障害を持ちながらも、あたり前の人間として普通一般の社会の営みの中に普通に参加できる機会を拡大し、障害の有無に関わらず、人間が平等に権利と義務を分にに応じて担って生きようとする対等の生活というノーマライゼーションを目指していることがうかがえる。日本においてもノーマライゼーションを目指していくことが求められる。

経営は75%がニューヨーク州、そして25%が作業等よりの利益や各企業からの寄付でまかなわれている。通所者は特に通所費のような負担はない。同作業所独自の製品は玩具から事務用品まであり、見学を訪れた人々は市中に出回っている商品がここで作られた商品である事を見学に来てはじめて知ったと驚いているという説明があった。

就業に対しては就職指導、履歴書の書き方、自己紹介、面接等について訓練が行われている。精神障害者だからとか作業所からの紹介という理由で給料が安いという事はなく、待遇も他の一般の従業員と全く変わりなく、同作業所はそれだけ自信をもって送り出していると話されている。企業側も精神障害者や身体障害者を受け入れようとする努力が見られる。

作業所内にはカウンセリング部屋があり症状悪化等に対してすぐ対応できるようにしてあり、気持ちが落ち着けるように室内は照明も暗くしたりなどの配慮が見られる。パートタイマーの精神科医師がいるが、あまり必要はないとのことだった。近くに精神科の病院があり、連携をとっているので問題はない。

（学生の感想）

- ・最初に行ったゲイトウェイ・インダストリーズは、仕事の機会を与え就職の斡旋もしているという事でした。作業をしている人たちはファイ

ルや封筒を作っていて、日本では障害者の方たちの作ったものは特別として見られ、値段も安いことが多いがここでは値段も変わらず、また、区別しているということはないということでした。日本では区別してあるようですが、区別する必要も安くする必要もないと思いました。アメリカでは1時間働いて6～8ドルになるそうです。働いている所を見せていただいたけど、にこやかにしていて、作り方を熱心に見せてくれたり、説明をしてくれたりして、真剣に働いていました。(重信早織)

- 私がゲイトウェイ作業所を見学して印象に残ったことは精神障害者や身体障害者の方々が黙々と作業をしておられ、1人の人は説明を下さったという姿でした。最終的には社会に出られるように訓練する施設で社会に出る人も企業に雇ってもらえるそうです。健常者と障害者が共に社会に出て働くにはどうしたらいいか考えられていたということでした。日本も健常者も障害者もいっしょに働くことのできる社会になるといいと思います。(甲斐美智子)

b) ナーシングホーム (老人ホーム)

i) ホルマーク・ナーシングホーム

ホルマークナーシングホームは50歳以上の人が入所でき、ユニットAとユニットBの二ヶ所に分かれています。ユニットAは医療や看護の必要な方が入所されていて、治療やリハビリ(作業療法士・理学療法士・言語療法士・嚥下療法士によるリハビリ)が行われており言語療法士による指導も行われている。リハビリ施設も完備している。移動式の入浴施設があり、それぞれの部屋で入浴でき、日本では考えられないような設備が整っている。ユニットBはバス・トイレ付きのプライベートルームで健康な人が入所している。

入所者はセンサー付きのリストバンドを付けて、徘徊しても居場所が確認できるように配慮されている。

それぞれの部屋は自宅に近いようなつくりになっていて壁紙・カーテン・家具・ベッドなど入所者の好みにより選ぶことができ、自宅で使用していた家具を持ってきてもよいようになっている。非常口が多く表示も大きく、安全性にも配慮

されている。ペットを飼うことはできないが家族が連れてきてもよいように、入所者の楽しみも考慮してある。長期の入所に対しても日々の変化がわかるように毎月ホールの飾り付けを工夫したり、一日に4つ以上の活動が開かれている(ゲーム・コーヒータイム・美容など)。毎月バースデーパーティを行い趣向を凝らしている。ホールには人工の滝がつくられ、いつも水が流れていて滝の周囲には植物が植えられていて、気分が落ち着く場所となっている。スタッフは、入居者のQOL(Quality of Life=生命の質、生活の質)を高めるためにいろいろと努力をしている。

ii) セント・フランシス・ナーシングホーム

最新の施設設備の整ったホームであり、入所者は160名で、うち20名は全介助で意識もなく植物人間状態の人、20名は重症で家に帰れない人、そして120名は健康な高齢者である。ホームはホテルのような施設で、1階の食堂はホテルのレストランのようであり、ウェイターやウェイトレスが食事の準備をしている。いろいろなメニューの中から食べたいものを選ぶことができるようになっていて、食事制限のある人は制限の中で幾つかのメニューから選ぶことができるようになっている。食事一つとってみても入所者に対しての配慮が見られる。食堂には救急カートが準備されており、急変にも対応できるように食事時にはナースが必ず入所者の状態を観察したり安全について気を配っている。

施設内には映画館があり、我々が訪問した時ちょうど上映中で多くの入所者の方が観賞していた。一人一人の生活を大切に、その人に合った生活を提供し、快適な暮らしができるように配慮してあった。ナーシングホームでは高齢者がその生涯を暮らすことのできる「生活の場」、すなわち、人間らしく生きるために個人がこれまでに作り上げてきた行動様式を積極的に許容して、高齢者にとってあたり前の社会生活が保証されており、医療が必要となった時にはきちんと医療看護が受けられる施設設備が整っている。健康な状態で入所し、病気になっても同じホームで治療看護が受けられることは、入所者にとってとても安心して生活できる場であることになる。また、その

施設設備が整っていて快適な生活ができるので、人生を大切に楽しんでいる様子がうかがえた。

(学生の感想)

- アメリカは自分の人生は自分の人生として子供に見てもらいより老人ホームに入るのが主流のようでした。アメリカの人は自ら進んで老人ホームに入ることが多いことから自主的に生活され、その生活を愉しんでおられるように思い、その事はよいことだと思います。そのためにアメリカのナーシングホームはホテルみたいな明るく立派な施設で入所者の方も生き活きとされている感じがしました。(甲斐美智子)
- ナーシングホームの第一印象はホテルみたい！と思いました。本当にどこかのホテルか結婚式場のロビーのような所で、高齢者の方がくつろいでおられました。昔スチュワーデスだったというクララさんとお話する機会がありました。日本語は「こんにちは」「東京」「新宿」などおぼえておられて、お互いに意思の疎通はできなかつたけど、楽しい時間でした。(上岸ちひろ)

c) 病院

滞在中、2つの病院を訪問する事ができた。3月22日セント・フランシス病院は日本では考えられないほど広い病室、広い廊下でゆとりをもった空間と入院期間が短いということに驚かされた(急性虫垂炎入院1日・大腿骨折2日・出産1日等)。設備に関しては日本と大差ないが、制服が科によって異なっていて20年前にキャップも廃止しスカートもやめてパンツにしている。

3月26日にはバッサー・ホスピタルを訪問した。100年以上の歴史を持つ300床の病院で外科・内科・産科・小児科・手術室がある。産科は正常分娩は1～2日の入院で1年に3千件の分娩があり、その約半数は異常分娩である。当病院は高レベルの技術や設備を有するので、近隣の病院では対応が難しい異常分娩になりそうな場合には、この病院で出産することになるからである。帝王切開が行われても4～5日の入院である。分娩室は10床あり出産後2時間ぐらいで病室へ移動する。日本の分娩室のイメージと異なっていて、入室するとホテルの部屋に入ったような印象であり、妊

婦に余分な不安やストレスを与えないような配慮がされている。部屋全体は木製のつくりであたたくく落ちついた雰囲気を与えている。必要時に天井や壁やベッドに備え付けられている分娩に必要な機械器具が引出しのような形で引き出され準備される。水中分娩の設備も整っている。コンピュータで妊婦の状態を観察し、短い入院期間であるが、より快適に過ごせるようにいろいろと工夫されている。精神的にも落ち着いた状態で入院生活を送れるよう部屋もゆったりできる配慮がなされている。入浴はジャグジーの設備が整っていて、腰痛の緩和に役立っている。朝食はバイキングで豪華な食事が準備されている。

小児科は20床で病室は安心できる場所というイメージ作りをしている。そのため処置や点滴注射や子供にとって嫌なことは原則的にすべて処置室で行われている。一部屋に3つのベッドがある。玩具の部屋が一室作られていて、部屋中玩具がたくさん準備されていて、子供達にとっては楽しい場所となっている。玩具についてはすべて洗浄や消毒が可能なものを購入している。子供が一人で乗れる大きさの玩具の車が準備されていて、退院の時にこれに乗って帰ることを楽しみにしていたり、手術を行うときは緊張を取るためにこの車に乗って手術室に向かうなど、入院生活を快適にするための工夫がなされている。親が24時間過ごせる部屋が準備されている。TV・電子レンジ・冷蔵庫・ベッドなどが設置されていて子供が安心して入院生活を送れるよう、また、親が長く病院に滞在できるよう準備されている。

先述のように1年に3千件の出産があり、うち280人が新生児集中治療室に入る。その理由は未熟児が多い。

手術室は心臓のための開胸手術(狭心症・心筋梗塞)でバイパス(動脈)手術が1日に1～2名、最大5名の手術が毎日行われている。開胸手術が可能で手術室が10部屋あり、すべて構造や配置が同じでどの部屋に入っても同じ手術ができるよう配慮されている。毎日12時に手術が開始され手術後は手術室がそのままICUになり、24時間モニターで監視され、あとは病室へ移動され3～5日で退院する。

(学生の感想)

- とにかく入院期間が短いことです。日本では考えられないくらい短い。でもこれはある意味よいことではないかと思いました。(陣内亜樹子)
- 病室にネームプレートがない代わりにリストバンドをしている。プライバシー保護を大切にしていることがわかりました。(伊垢離けい子)
- 病院独特の匂いがない。訪問した病院はどこもホテルのようで綺麗でした。(栗本麻衣子)
- 全体を通して感じたことは、病院ではあるが日常生活以上に快適に過ごすことができるよう、考えていると思った。病室はシャワーやトイレを備えた個室が一般的であった。(兼重亜矢子)
- 特に興味を持ったことは、ナースの制度のことで、ナースの仕事が資格で細分化され医師の役割に近い部分、例えば薬を処方することができる「ナーシングプラクティショナー」まで及んでいて、資格を取得するために大学に行ける制度等があることです。(甲斐美智子)

施設訪問のほかに州立大学の看護の授業風景を見学させていただき、受講態度や講義のノートを見せてもらい、学生が熱心に積極的に受講している様子を知ることができた。我々が実際に受講した看護倫理についてはグループワークの予定であったが、資料が遅れて予習が出来ていなくて、日米間の看護学生について・看護の役割・人種や保険の仕組み・臓器移植等について質問し合い、アメリカのナースの生の声が聞けて楽しい時間になった。もっと日本の看護について知っておくべきだったと学生は感想を述べている。このクラスは全員ナースで病院で実務につきながら資格を取るために受講をしている。(資格をとればナースの医療行為の範囲が広がり、薬物を処方したりできる。)クラスの半数以上が病院や政府からの援助を受けている。施設訪問だけでなくアメリカのナースと時間を取って直接話をする機会が得られて学生にとってとても良い経験になった。これからもこのような計画があってもよいという学生の希望があった。

C) 幼児教育学科の施設訪問

幼児教育学科からは、先に示したとおり、1年次の学生6名と教員1名(矢藤)が参加した。施設訪問では、次の6か所を訪問した。

まず3月21日に幼児教育センター(Early Education Center)、22日に聖フランシス病院の保育センターとコミュニケーション障害センター(Day-care Center and Center for Communication Disorders in St. Francis Hospital)、25日にニューヨーク州立大学ニューパルツ校子どもセンター(Children's Center of New Paltz SUNY)、26日に農業従事者保育園(Agri-business Child Development)、そして28日にバッサー病院(Vassar Brothers Hospital)である。訪問では常に州立大学が手配してくれた自動車を使用し、同校が用意した運転手・通訳(たいていの場合兼務)が同行した。

以下、日程順に訪問の概要と学生の様子について述べ、本節の最後に幼児教育学科の施設訪問全体を通して感じたことと課題を挙げておく。

a) 幼児教育センター

最初(3月21日)に訪れたのは、幼児教育センターである。州立大学日本語科助教授のクリス・ロビンズ(Chris Robins)氏が同行してくれた。

ここは、統合保育を行っている保育所である。障害児と健常児が同数在籍している。私立の施設であるが、州の補助金を受けているため、人的・物的ともに環境は整備されている。保育者には学士取得者だけでなく修士取得者もあり、専門性の高い保育者が多い。保育者：子ども=1:2という手厚い配置となっており、その他にパートタイムの音楽教師などがいる。

私たちは、3グループに分かれていくつかのクラスを回った。その一つに音楽の授業があった。パートタイムのベテラン音楽教師が、キーボードを緩急自在に弾きながら(曲の一つは日本語の「さくらさくら」であった)、子どもたちを楽しく遊ばせていた。クラス担任の保育者2名が、障害のある子どもをひざに座らせたりしながら活動の補助をしていたのであるが、その姿は実に自然で、しばらく障害児と気づかないほど、健常の子どもたちに溶け込んでいた。曲の中には、日本という「うさぎとかめ」のような内容のものがあ

り、音楽教師がうさぎでもかめでもいいんだよと歌いかけていた。

学生は、クラスに分かれて子どもと触れる機会を与えてもらい、言葉の壁をものともせず、それぞれ楽しく子どもと関わっていた。

スタッフの部屋に戻っての質疑応答では、予想以上に学生から質問が出た。その多くは、教材など直接子どもにかかわる物的環境に関するものであった。例えば、じっと座ってられない子どものための弾力性のあるクッション、何かを噛んでいなければ落ち着かない子どもが首に提げていたチューブ、下に潜り込んで遊ぶためのパラシュート生地などが新鮮に映ったようで、それらについてさかんに質問が出た。

b) セント・フランシス・ホスピタル（保育センター、コミュニケーション障害センター）

3月22日には、英語レッスンの講師であるキャンデス・モッコウ（Candace Mocko）氏、大学院生のロンダ・アンダーソン（Rhonda Anderson）氏、そして州立大学名誉教授のアルフレッド・マークス（Alfred Marks）氏が案内してくれた。

保育センターは、病院内の保育所である。病棟とは別棟の小さな建物だが、内部は合理的に区切られており工夫が見られる。建物への出入りのセキュリティは確実であったが、日本の方がむしろ、2001年6月8日の大阪教育大学附属池田小学校への侵入殺傷事件以来この1年で、嚴重になってきている。開所は8時から17時である。病院の保育所であることから開所時間拡大の需要はあると考えられるとのことだが、特に時間の拡大は考えていない。病院としてはコストの問題もあり、またアメリカではベビーシッター等が普及していることが関わっていると思われる。

学生は、マークス氏の示唆に促されて、室内の壁面などの環境構成に関心を持ったようであった。「子どもをほめる101の言葉」といったポスターに感心して一部を譲り受け、帰りに寄った教材専門店で購入した学生もいた。

コミュニケーション障害センターという聴覚及び言語の障害をもつ人のための施設では業務内容と設備の説明を一通り受けた。最新機器を備え、障害の程度の把握、障害の程度に応じた訓練・指

導等を行っている。学生はいくつかの機器や道具に実際に触れさせてもらい、驚いたり感心したりしていた。

c) ニューパルツ子どもセンター

3月25日のニューパルツ子どもセンターは、州立大学の大学院生、磯部吟子氏が案内してくれた。ここは大学内の保育所である。利用者の中心は学生である。子どもの保育は、保護者が学生、教職員、地域住民の順に優先され、保育料も学生、教職員、地域住民の順に高くなる。さまざまな年齢層の学生が学ぶアメリカの大学ならではの保育所である。日本でも今後作られ、発展していくだろう。

保育は有資格の保育者だけでなく、インターシップの学生のサポートも得て行われていた。磯部氏自身も現在小学生のお子さんを以前ここに預けておられた経験などから、いろいろと質問しながらそれを学生に通訳してくださり、学生の学習に大いに助けになった。

ここでも学生はクラスを回りながら子どもと活動させてもらい、楽しんでいた。見学する中での関心の中心はやはり環境構成だった。

d) 農業従事者保育所

3月26日の農業従事者保育所には、州立大学の教育学部幼児教育学科助教授レズリー・カウス（Leslie Couse）氏と同日本語教師の松岡祐子氏が同行してくれた。ここは農業を中心とする移民の季節労働者を利用対象とする、主としてマイノリティのための保育所となっている。識字教育プログラムに力を入れており、そのことが新聞記事で紹介されたこともある。

園内には研修を呼びかけるチラシが掲示されていた。この保育者はこれまでは無資格でもよかったが（もちろん実際には有資格者も勤務している）、次年度より有資格であることが義務づけられたために、研修による資質向上や大学での学位取得が奨められていた。

ここでも学生はクラスをローテーションしながら子どもと触れる機会を与えてもらった。

e) パッサー・ホスピタル

3月28日には、モッコウ氏と山内も同行し、

バッサー病院の小児病棟や新生児ICU等を見学した。治療の際や手術に臨む際の子どもの不安を取り除くためのさまざまな配慮や、入院している子どもの保護者への配慮などの説明を受けた（詳細は看護学科の項で述べた）。例えば、移動可能な子どもであれば治療は治療室のみで行い、病室はあくまで安心できる居室とされていること。電動バギーが用意されていて、子どもは手術に向かう際と退院時のみこれに乗ることができるようになっており、怖い手術を一方で楽しみにもしていたり退院への希望を強く持ったりできること、等の配慮があった。保護者が歓談したり休息したりできる子どもが入れない専用ルームもあり、保護者の快適さや利便性にも配慮が多く見られた。それらは幼児教育学科の学生にとっても示唆深いようだった。

f) 幼児教育施設訪問全体を通しての感想と課題

大学内の保育所は今後日本でも需要が出てくると思われ、そのシステムには学ぶところが多かった。また農業従事者保育所は、移民労働者やマイノリティの識字といった、日本ではほとんど省みられないが一部の工業地域などで問題となりつつある課題に直接向き合っており、示唆深かった。しかし概ね、日本の保育所の方がサービスのシステムも内容もきめ細かい。ジャンクフード的にも見える給食などはそのよい例である。しかしだから日本の保育が進んでいるということではなく、日本ではベビーシッターや近隣間での助け合いがアメリカ（ニューパルツ）ほどには普及していないので、保育所が相当のサービスを用意する必要に迫られているともいえる。また給食も、そもそも食事に対しておらかな文化であることの反映に過ぎないのかもしれない。

学生は、環境構成や教材等、直接目に見えるもの（特に「かわいい」もの）には感心なほどに敏感であり、大いに刺激を受けたようだ。上には挙げなかったが、州立大学教育学部棟内のニューヨーク州教員センター（自由に教材作りをするための道具が完備されており、会議等にも利用できる）の備品には大いに興味を示し、後日注文して購入したりしているほどである。

しかしアンケートを見てみると、施設訪問につ

いて特別に印象に残ったような回答はなく、振り返って多くを学べたという感じはやや薄いのかもしれない。そもそも日本の制度について知らなければアメリカの制度について説明を受けてもその長短について理解しがたかったようで、これは今後学生を海外に送り出す際の事前学習課題の一つになると思われる。また訪問の際に、学科の教員が専門的な見地から補助的なアドバイスなどをすることが重要である。

ただ、まだ若い学生にとっては、海外でホームステイをして買い物に行ったり郵便局に行ったりするということが自体が一大イベントであり、そのインパクトがあまりに大きいということがあるために相対的に施設訪問の印象が小さくなるということがあるように思う。そしてそれは価値のあることであり、施設訪問にはクリアしておくにこしたことはない課題があるとはいえ、学生それぞれに何か印象深いことがあれば、その後の実習や授業を通じて改めて学ぶこともあると考えられる。現に海外に行った学生が卒業研究のテーマに海外の保育事情を取り上げたりしている。この海外研修における幼児教育施設訪問は、その後の学習の契機を提供しているという意味で非常に意義深い。

学生は、すべての訪問先と各種の会合で、手話による歌や手遊び等を披露した。子どもも大人もみなそれらを楽しんでいた。また学生はすべての訪問先で子どもと楽しく関わっていた。学生はアメリカの幼児教育は云々という認識だけでなく、子どもと保育者の、言葉を越えた普遍的な交わりを体験的に理解したと思う。こうした学習を埋もれさせない刺激を与えられるかどうかは学科の教育課題である。

D) 観光

3月19日ニューヨーク州の州都オルバニー入りした一行は、その翌日ニューパルツ・ビレッジ入りする前に、オルバニーの観光を楽しんだ。ニューパルツ国際交流協会の役員でもあり、オルバニーにも以前住んだことのあるジョージ・ダンスキン（George Danskin）氏が我々を案内してくれた。まずニューヨーク州立博物館を見学し、そ

の後ニューヨーク州庁舎へと行った。旅行後にとったアンケートでは、オルバニーの見学は回答者18人中16人が「よかった」と答え、1人が「ややよかった」、1人が「普通」と回答している。ニューヨーク州はそれまで好天で暖かい日が続いていたようだが、我々の到着と合わせるように寒い気候に逆戻りし、雪の中で観光をしなくてはならないのは残念であった。

ニューパルツにおいては、アメリカで最も古くから住み続けられている通りであるヒューガノット・ストリート (Huguenot Street) やニューパルツ地域のシンボリック的存在であるモホンク山 (Mt. Mohonk) などを訪問した。これについても14人が「よかった」4人が「ややよかった」と回答しており、概ね好評であった。古い町並みや自然に触れることができ、よかったようである。

また、ニューヨーク・シティの観光は3月24日、全員で日帰りで行った。ニューパルツ・ビレッジからはスー・シャーバーン (Sue Sherburne) 氏とケイレブ・クロック (Caleb Clock) 氏、それに州立大学の日本人留学生、平方亜希氏が同行してくれ、山内の友人でニューヨーク在住の大佐町の元外国人指導助手ジェームス・ブロードウズ (James Brodows) 氏も合流してくれた。

ニューパルツ・ビレッジから鉄道の駅があるプーキープシー (Poughkeepsie) まで車で送ってもらい、そこからニューヨーク・シティに向かった。バスという交通手段も考えられたが、大人数のため乗り切れないことも考え、鉄道を利用した。グランド・セントラル駅 (Grand Central Terminal) で電車を降り、テロの現場グラウンド・ゼロ (Ground Zero) 付近に行った。世界貿易センター (World Trade Center) 跡地にはその頃、プラットフォームが作られ、見学することも可能であったが整理券が必要であり、とても込み合っていたので、犠牲者のために捧げ物が数多く捧げられているセント・ポール礼拝堂 (St. Paul Chapel) に行った。幼児教育学科の学生6人は千羽鶴を折ってきていて、ここに捧げた。その後はバッテリーパーク (Battery Park) に行き、昼食をとった。午後は、自由行動としてそれぞれが行き

たいところに行った。エンパイア・ステート・ビルディング (Empire State Building)、タイムズ・スクエア (Times Square)、5番街 (Fifth Avenue)、セントラルパーク (Central Park) などを訪問したようである。

また、4月1日にニューアーク (Newark) 空港から出発するため、前日の3月31日には空港そばのホテルに滞在したのであるが、その晩にも多少の時間があつたので、ニューヨーク・シティに出かけて行った。その2回が今回のニューヨーク・シティ観光であるが、アンケートの結果は「よかった」が11名、「ややよかった」が7名であった。とても楽しかったという意見が多いが、そのため、時間が足りなかったという感想も見られた。確かにニューヨーク・シティにはもう少し時間が必要だと思われる。

E) ホームステイ

ホームステイは学生がもっとも楽しみかつ不安に思っていたことの一つである。先述の通り、ニューパルツ国際交流協会を通じてホームステイ先を探してもらった。また、電子メールを通じてニューパルツ周辺の山内の知り合いに協力を依頼したところ、計11軒の家庭が協力を申し出てくれた。メルボルンの研修旅行では、語学学校に登録してあるホームステイ先を斡旋してもらった。メルボルンはとても大きな都市のため、数多くのホストファミリーが得られ、原則として一人一家庭のホームステイが体験できる。だが、ニューパルツ地域では家庭数が限られるため、一人一家庭のホームステイはやや困難である。しかし、大佐町の姉妹都市ニューパルツ・ビレッジでは、町全体でとても暖かく迎えてくれるという感じがある。ホームステイによりアメリカの生活が体験できたとか、一生忘れられない思い出になったとか、貴重な体験ができたようである。ただ、複数でホームステイすることにより安心感があつたと同時に、つい日本語で話してしまうという甘えや、複数で同一家庭に滞在することによるストレスが多少あつたようである。

F) 各種パーティ

我々の滞在中、いくつかのパーティを催していただいたが、その代表的なものは、3月23日のダンス・パーティと27日ユダヤ教の祭日の過ぎ越し祭 (Passover) に開かれる晩餐会セイダー (Seder) に我々も招いてもらったことだ。ダンスが体験できてよかったとか、ダンスが好きになった、のような感想が見られた。また、セイダーについても日本にはない習慣が体験できてよかったという意見が見られた。その他、ニューパルツ・ハイスクール (New Paltz High School) で行われたミュージカルに招いていただいたり、イースターの行事に招いてもらったりした。参加者にとってはどれも貴重な経験となっているようである。ただ、ミュージカルを英語で見るのはやや難しかったという意見もあった。また、日本の大学でも教鞭をとられたことのあるアーロン・コーエン (Aaron Cohen) 氏によって日本語でセイダーやイースターについて説明してもらえたことは幸運であった。

G) 英会話レッスン

英会話レッスンは州立大学のキャンデス・モックウ氏が担当してくれた。英会話レッスンについては意見が分かれ、「よかった」が7名、「ややよかった」が5名、「普通」が2名、「あまりよくなかった」が4名であった。わかりやすかった、楽しかったという意見もある中、私には難しかった、少し眠かった、人数が多すぎたなどの感想もあった。やや多くの、そしてレベルも異なる受講生がいる中、レッスンを行うのがやや難しかったのではと思われる。また、時差ぼけもある中、訪問やホームステイで英語を話したりでかなり疲れていた学生にとって、レッスンを受けるのは少し

きつかったかもしれない。

今回、州立大学で日本語の授業を取っている学生が我々を相手に日本語でインタビューをする機会があったが、そのような機会をうまく活用すれば、お互いに英語と日本語のレッスンをし合うようなことが可能かもしれない。

おわりに

今回の学術訪問団派遣については、いろいろな成果が見られ成功であったと思う。毎年、このような本学代表の教員を含む学術訪問団を派遣するというのは難しいことであろうが、学生参加者を中心とする研修旅行は毎年実施し、交流を深めていきたいと思う。その中で希望する教職員には積極的に研修に参加してもらい、それぞれの研究を深めるのに役立ててもらえればと思っている。

今回の我々の研修については、ニューパルツでは地元紙の *Poughkeepsie Journal* や *New Paltz Times* にも取り上げられた。また新見においては、準備やライオンズクラブからいただいた奨学金関連の記事も含めて『山陽新聞』『備北民報』『備北新聞』や大佐町国際交流協会の『国際交流だより』においても取り上げられた。

末筆になったが、今回の訪問団を親切にもてなしてくださったニューパルツ・ビレッジの皆様には心から感謝の意を表したい。また、その他準備の段階でお世話になった方々にもこの場を借りてお礼を申し上げたい。

註

- 1) 山内 圭「メルボルンへの海外研修旅行報告記」『新見女子短期大学紀要』第19巻, pp. 169-179

資料 1

MEMORANDUM OF UNDERSTANDING BETWEEN NIIMI COLLEGE IN JAPAN
AND THE STATE UNIVERSITY OF NEW YORK AT NEW PALTZ IN THE UNITED STATES

In recognition of the mutual benefits of scholarly interaction between the two institutions as well as of the fraternal ties between the communities of New Paltz and Osa, Niimi College in Japan and The State University of New York at New Paltz in the United States agree in principle to the following :

1. Both universities agree to cooperate in a spirit of mutual understanding and goodwill and to strengthen our ties of friendship.
2. Through close mutual cooperation, both universities shall examine the possibilities for enhancing educational exchange opportunities for our students, staff and faculty.
3. This agreement does not include any immediate funding ; however, both universities shall support joint programs, whenever it is feasible. In general, each side shall bear the cost for its participation in projects and activities unless otherwise agreed upon.
4. Implementation of this agreement shall be discussed and agreed by both institutions.
5. Through such activities, both universities shall promote friendship and goodwill between the United States and Japan and shall contribute to the academic and cultural benefit of both nations.
6. This agreement shall become effective from the date of signing by both parties and shall be reviewed every five years thereafter, unless either side notifies, in writing, the other of its intention to terminate it.
7. Either university may terminate the agreement in advance of its normal expiration by providing the other university with six months' prior written notice. In this case, the program(s) or the activity(ies) already approved by both parties shall be allowed to be completed under the conditions of this agreement.

This present agreement is signed in four copies, two in English and two in Japanese, the two texts being equally valid.

Dr. Roger Bowen
President
State University of New York at New Paltz

Dr. Shiro Nii
President
Niimi College

Date

Date

資料2

日本国新見公立短期大学と合衆国ニューヨーク州立大学ニューパルツ校との間の協定に関する覚書

大佐とニューパルツとの姉妹都市関係にともない、日本国新見公立短期大学と合衆国ニューヨーク州立大学ニューパルツ校は、両機関の間での学術交流活動の相互利益を認め、下記の基本的事項に同意する：

1. 両大学は共通理解と友好の精神で協力し、友好の絆を深めることに同意する。
2. 密接な相互協力を通じ、両大学は学生及び教職員の教育的交流の機会を増やす可能性を検討するものとする。
3. この協定はいかなる資金をとまなうものではない。ただし、両大学は実現可能な共催事業についての援助を行うものとする。基本的に、両者が合意の上、計画及び活動への参加費用はそれぞれが負担するものとする。
4. この協定の実行にあたっては、両機関による協議の上同意されるものとする。
5. 両大学は上記の活動を通じ、日本国と合衆国との友好関係を促進し、両国の学術的・文化的利益のために寄与するものとする。
6. この協定は両者の署名の日付より有効とし、一方側が書面により終了したい旨を伝えない限りその後5年毎に再検討するものとする。
7. 通常の協定の終了期限に達する以前にいずれの大学からも6ヶ月前に書面による申し出によって協定を停止することができる。この場合、両者により既に認可された計画及び活動は、この協定の条件に基づいて行われるものとする。

この協定は、日本語で2部、英語で2部の計4部に署名し、どちらの言語のものも同等の効力を有する。

新居志郎博士
新見公立短期大学学長
日付

ロジャー・ポーウェン博士
ニューヨーク州立大学ニューパルツ校学長
日付

資料3

ニューパルツ学術訪問団旅行スケジュール

- 3月19日（火）13：45関西空港集合
15：45関西空港より UA810便でサンフランシスコへ
8：15サンフランシスコ着
11：00サンフランシスコより引き続き UA810便でシカゴへ
17：01シカゴ着
18：00シカゴより UA1448便でオルバニーへ
20：46オルバニー着後ホテルへ
- 3月20日（水）10：00ホテル出発
オルバニー観光（ジョージ・ダンスキン氏案内）（州庁舎・州立博物館）
ニューパルツビレッジホール（役場）着（15時頃）
ビレッジホールにてオリエンテーション
学生はホストファミリーと帰宅
18：30新見ライオンズクラブ三上会長、ライオンズクラブ奨学生、山内はニューパルツ・ライオンズクラブ例会出席（会場：プラザダイナー）
塚本と矢藤はルズ&リノ・デロッサ夫妻宅でマークス氏夫妻、コーエン氏夫妻、ティビドー氏と夕食
- 3月21日（木）幼児教育センター（幼児教育学生）（9：00-11：00）
ゲイトウェイ・インダストリーズ（看護学生）（9：00-12：00）
英語レッスン（13：00-16：00）
- 3月22日（金）セント・フランシス病院（全学生）（10：00-14：00）
大学と図書館案内（15：00から）
ニューパルツ高等学校でミュージカル“P. T. Barnum”（19：30-）観劇
- 3月23日（土）英語レッスン（9：00-12：00）
17：00ダンスパーティ開始
- 3月24日（日）ニューヨーク・シティ訪問
- 3月25日（月）州立大学ニューパルツ校託児所（幼児教育学生）（9：30-12：00）
ホールマーク・ナーシング・ホーム（看護学生）（9：00-12：00）
英語レッスン（13：00-16：00）
- 3月26日（火）農業従事者保育所（幼児教育学生）（9：00-12：00）
バツサー病院（看護学生）（9：00-11：00）
英語レッスン（14：00-17：00）
- 3月27日（水）L.カウス氏講義（幼児教育学生）（9：30-10：30）
M.クリスチャンセン氏、J.ラファエル氏講義（看護学生）（9：30-10：30）
図書館案内（全学生）（午前中）
英語レッスン（14：00-17：00）
アーロン・コーエン氏によりユダヤ教の過ぎ越し祭（Passover）とキリスト教の復活祭（Easter）についての説明
ユニゾン・アート&ラーニング・センターでユダヤ教の過ぎ越し祭の晩餐会セイダー参加

- 3月28日（木）アン・チャップリン氏講義（看護学生）（8：30－正午過ぎ）
バツサー病院（幼児教育学生）（9：00－12：00）
アル・マークス氏によるヒューガノット通りの観光案内（全学生、クリス・ロビンズ氏
同行）（14：00－）
- 3月29日（金）式典と朝食（9：00－）
日本語専攻アメリカ学生との交流会（全学生）
英語レッスン（14：00－17：00）
- 3月30日（土）フリー
- 3月31日（日）イースター
14：00ニューアークのホテルへ出発
- 4月1日（月）早朝ホテル出発、ニューアーク空港へ
7：00ニューアークより UA853便でサンフランシスコへ
10：13サンフランシスコ着
11：55サンフランシスコより UA809便で関西空港へ
- 4月2日（火）16：50関西空港着、解散